

創立30周年記念座談会

創立30周年記念座談会

40周年へ向かって!! ～チャレンジしよう～

□日 時	平成 24 年 11 月 14 日 (水) 午後 6 時 30 分
□場 所	ホテル・ニューオータニ博多「高砂の間」
□出 席 者	大野太三・廣瀬政光・前田恒善・村口栄一・山下洋生・吉田匡人
□司 会	記念誌部会アドバイザー 森本茂雄
□アドバイザー	30周年記念事業実行委員会 委員長 小副川浩二 30周年記念事業実行委員会 副委員長 岐部定則
□記録編集	30周年記念事業実行委員会 記念誌部会 森本裕朗・小林憲治 金納健太郎・前田恒善



〈写真〉左より、大野太三、廣瀬政光、前田恒善、村口栄一、山下洋生、吉田匡人



小副川 忙しい中お集まりいた
だきましてありがとうございます。
本日は30周年記念事業委員会の方
で少しリクエストを出しまして、
10周年、そして20周年の節目節

目に必ず座談会をやって、振り返りと将来のうねり
という話をこの会議でしています。今回も40周年に
向けてという事で皆様方に集まって頂いて現状への期待や対応について、各々考えがあると思います
し、また10年後に向けてどうあるべきかと言う事も
含めて皆様で座談会をして頂きたい。

小林 今日は忙しいところを有難うございます。
今、小副川委員長から話が有りました様に、10年毎にこう云う企画で座談会をやっています。今日は会員を代表して6の方に出席して頂きました。忌憚な
き発言で結構でございます。自由な発想で提言など
も含めて、色々なご意見を期待しています。

司会進行係の森本さんの方から4つのテーマを用意されています。4月6日には本日の皆さんのお発言をまとめ、写真を入れて、記念誌の中に特集として編集し、当日記念式典出席者にお渡しします。宜しくお願い致します。

森本(茂) 司会を委員長から仰
せつかりました森本です。宜しく
お願い致します。テーマを4つほど
挙げさせて貰いました。

そのテーマについてこれまで
当俱楽部がやってきた事を少し私が覚えている範
囲で書いてきましたので、参考にして貰えたらと思
います。20周年の時に座談会を行ってその記録が
残っており、今読んでおりますと丁度成人になつた
かなという言葉が飛びかっておりまして、そういう雰
囲気の座談会になっております。10年たちまして今
30年、40年に向かって働き盛りのクラブになってど



創立30周年記念座談会

うあるべきか、という様な事を話し合って頂ければと思います。

テーマは4つございますが、一番最初のテーマは私が進行をさせてもらって、次の「クラブの親睦を深めるには」については、一番若い方に進行をお願いするということで、吉田さんにお願いします。「木を育てるより人を育てる」というテーマには人を育てるということで、一番年上の型が良いと思いますので廣瀬さんにお願いします。「魅力ある福岡北ロータリークラブに向かって」は皆で話し合いたいと思います。

最初のテーマの「奉仕活動について」、アイウエオ順で大野さんから話して頂ければと思います。

ロータリークラブの奉仕活動について



事を言っておられます。

お便りの会は初めて聞きました。「タオルを集めて雑巾にして施設へ送る」これは違うのですね。「スペシャルオリンピック」、これはロータリーじゃなくて、他の所で聞いております。そのスペシャルオリンピックの会が有って、そこにも行った事があります。

森本(茂) 私もスペシャルオリンピックには寄附を続けております。

大野 今の状態で4年目ですけど（5年目かな。）どうだと言われましても、私としてはあまり身近に無いというか……ですね。

森本(茂) 廣瀬さん、お願いします。

廣瀬 一般論的な話をさせて頂きますと、出来るだけクラブ奉仕では例会に出てきて皆さんのクラブ行事に積極的に参加をして、会のお世話を通じながらクラブのサービスに貢献をしたいと思います。職業奉仕については「自分の利害を離れて相手の為にな

るという事を常に考えて職業奉仕をしていく。」という事が職業奉仕の基本的な精神かなと思います。

森本(茂) では、次お願いします。

前田 自分が、何か奉仕活動をやっているかどうか、というと今までにやったかなと疑問がありますが、野球部で戦力になったという事で「おまえは奉仕をしている。」という事を言われたのを思い出したので、もしかしたらそういう奉仕は出来たかなと思います。

森本(茂) では、次は村口さんでしょうか。

村口 ロータリークラブの奉仕活動という話なんですが、生活と商売と会社とお客様という部分と、やっぱり別の世界の中で生きていかなければならぬなと私は感じております。

過去に、子供会の会長、育成会の会長、地区的体育委員をやったり、あとは、中学高校大学のOB会の会長をやって、自分の商売と全く関係ないところで活動していくのは大事なことかなと私は思っております。

ロータリーに入らせて貰って、ここに書いてある幾つかのテーマをやる事は、素晴らしいなと思っております。

森本(茂) 次、山下さんお願いします。

山下 ロータリーの奉仕活動に米山学生とかお便りの会とか書いてありますが、これが奉仕活動だという認識は無かったですね。私の認識では逆に「木を育てるより人を育てよう」の所に書いてあるボイイスカウトの奉仕とか、学校に図書を配布とか、後は確か西公園で付属の小学生を集めて植樹をしたとか、これが奉仕活動とばかり思っていたので今、認識不足を感じております。

人が子供に自分の子供だけではなくて、世間の子供に対して興味を持つというか関心を持つというようなことが、特に大事なことではないかと思っております。

たとえば特別支援学校とかですね、親も苦労しながら育ててあるような環境の方にも、普通の活動と違って手間もかかるとは思いますが、時間に余裕があるのであれば、個人的にですけど目を向けて良いのかなと思っております。

森本(茂) 最後に、吉田先生お願いします。

創立30周年記念座談会

吉田 僕は奉仕活動というか、診ているのは特に老人の方が、それも一般家庭から悪い言葉で言うと追い出された形の方が多いです。家で面倒見きれなくなつた認知症の進んだおじいちゃん、おばあちゃんを預かる場所に日常生活の健康管理を行つてゐる仕事なんですが、そこに行った時に、これはして上げようとか、この方に医療や介護でマットは下りないけれども、どうしても足がしづれる方に軽いマッサージ付きのマットを僕が自分のポケットマネーで買ってあげるとかは偶たまにします。

子供に対しては先程おっしゃった様に「木を育てるより人を育てよう」の方で出来ると思いますが、半分家族から見放された、今まで日本を支えてくださつたおじいちゃん、おばあちゃんに対して、「今までありがとうございました。」という感謝の気持ちを込めた奉仕活動も出来たら良いと僕は思います。

森本(茂) ありがとうございます。今までの話題の中で皆さんご意見があれば、おっしゃって頂ければと思います。小副川さんいかがですか。

小副川 ロータリークラブの奉仕活動は幾つかあるんですけど、我々の年代からすると、仕事を通じて色々な活動をするという事が一番ピッタリするかなと思います。ですから自分の仕事を熱心にやるという事が、原則だと私は思っておりますし、基本的には吉田先生は医療を通じて奉仕活動をするし、前田先生は弁護活動を通じて奉仕活動をするという事で、ですから、特別木を植えたり、本を寄贈したりという事だけが表に出てくるのが奉仕活動ではないのではと私は思っています。

森本(茂) 何かほかにございませんか。

大野 今のは個人個人の活動が違つても良いという事ですか?

小副川 基本はですね、職業奉仕なんですよ。ですから自分の仕事を一生懸命やる事によって地域の人に喜んでもらうとか、または子供たちに将来性を与えるとか、また老人介護の問題もそう言うようなことで解決されるのではないかという事で、あまりそれ以外に物を送るとか、お金を送るとかいうのは、ロータリー奉仕活動は、もう少し違うのではと私は

理解しております。

村口 吉田先生とか前田先生は、人が前にいて喜んだ顔、悲しんでいる顔に対してリアルタイムで反応できる。我々は電気事業を通して安定供給の中でやっているので物を納めてどうこうで、それを何処まで喜んでくれるのかは分からないんですが。電力の安定供給の仕事に協力して、皆の生活が現在まで来ているというのは、我々としては誇りに思つていのではないだろうか。

これがリアルタイムで皆さんが喜んで下さるならもっと力が入りますよ。

小副川 大きな視点で言うと電気事業も日本の産業・経済や国民生活、大きくは国力を支えている大きな部門であつて、多くの人に幸せを与えているのですから、直接ありがとうございますとか、ニコッと笑顔になつてもらうとかは無いかもしれませんけど、広い意味で考えれば私たちが豊かに生活できるという事はそういう事業のお蔭だと思います。

村口 土木工事もそうですよね。

小副川 大いに誇りを持って貰いたいですよね。

森本(茂) それでは1番目のテーマはこの程度に致しまして2番目のテーマ「クラブの親睦を進めるには」に移ります。では、吉田さん宜しく司会進行をお願いします。

■ クラブの親睦を進めるには

吉田 僕の場合は親睦委員長をやつた事がありまして、入つて3年目だったと思いますが、その時にとんでもない事をやりまして非難こうざ嘆嘆でございました。前期SAAと会長、幹事のご苦労さん会の時に中洲のクラブで夜間例会を企画しました。僕は家族が来ない唯一の夜間例会、男同士の会だから良いんだろうと思つてしたんですが非難嘆嘆で。



森本(茂) 良いという話もありましたよ。

吉田 親睦を深めるには、男同士の時はそういう

創立30周年記念座談会

所へ行ってワイワイお酒を飲める方、飲めない方も含めて横に小奇麗な方を置いてワーッと親睦を深められたら良いなと思ったのですが、「そういう事じゃないと」諸先輩方から怒られまして・・・もし自分が親睦委員長になられたら、親睦を深めるために、夜間例会だけではなく、もう少し親睦を深める事について意見をお願いします。

大野 ここにテーブル会・夜間例会・野球部とかいろいろ書いてありますが、これらは決まったものではないでしょ。何かあれば他に追加してもいい訳ですか。

森本(茂) 音楽もやりませんかというアンケート結果もありました。

大野 テーブル会はただ飯を食うのではなくて、ほかに何かどつか一泊温泉旅行をするとか、ここから食み出して考えても問題ないんでしょ。

吉田 あまり食み出し過ぎると怒られますよ。

大野 テーブルの人の親睦を進めるが当初の目的でしょ。枠の中に決められて、「これをやりなさい、あれをやりなさい。今までずっとこれをやってきました。」というんじゃ、私みたいに「身近じゃないけん出席せんめいかね。」という捻くれ者が出てくると思うんですね。だから「自分で考えて自分で出来るようなものが、そういう余地がロータリーにはあるんですか。」と逆に聞きたいな。

森本(茂) 十分あります。これも段階的に考え考えここまで増えてきたんですね。

大野 そういうのがいいと言われれば、度を越さなければもっと面白いロータリークラブになるかも知れない。

山下 旅行会と書いてありますが、旅行会てなんですか。

森本(茂) 旅行会は何回かした事がありますよ。

小副川 ゴルフを一泊でしたこともありました。土曜日に行って旅館に泊まって食事をし、翌日ゴルフをして帰ってきました。

大野 何故駄目になったんですか。

吉田 駄目になってません。今もやっています。

村口 全員強制ではなくて、土曜日用があるから日曜日ゴルフだけとかいう自由参加で。

森本(茂) 囲碁・麻雀・カラオケは親睦委員会の方が頑張った時にできた催し物です。

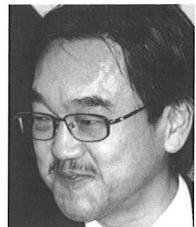
大野 それじゃ、相当親睦委員が頑張らないといかんですね。

吉田 じゃあ、廣瀬さん親睦委員長になったなら。

廣瀬 何のための親睦なのか、ただ集まって騒いでお酒を飲んだだけの感じじゃなくて、単なる異業種団体の親睦会でもなく、ロータリーの「4つのテスト」の精神というか、そういう心を持たれた方の集まりであると一つの線がしっかりとしていて、老いも若きも異業種でありながら年代も違うが、そこで温かい友情を育まれる様な催物であれば何でもいいのではないか。こういうふうな考え方でやっていく事が本当の意味で親睦につながって行くのではないかと思います。

吉田 では、前田さんお願ひいたします。

前田 ロータリークラブの親睦を進めるシステムは良く出来ているなあと思うのが第一の感想です。弁護士の集まりといったら自分の顧問先とかそういう所の飲み会が多く、そういう所に行くと大体上座に座らされて持ち上げられるわけで、非常に弁護士として歪な成長、という風になっていたなと思うんですね。



先程から話題になっているテーブル会、テーブルごとに集まって、しかもローテーションで回して必ず1回はテーブル会をやると。そういうシステムはとても良く出来てると思います。一つの一種運命的な共同体的な、他の異業種交流会と違った作り方は、長年培われた英知からの結晶なんだろうなといつも感心しています。

さらにその中でも野球部に入らせて頂いて、色々な方々と交流させていただいてますが、まあいろんな集まり、例えばマージャンも学生の時以来やっていないので、マージャンの集まりでしたらやらせて貰いたいなあと思うし。先程、大野さん指摘のテーブル会で1泊とか確かに面白い仕掛けだと思うし、そういう点では色々なバリエーションで益々この親睦は高

創立30周年記念座談会

まると思います。親睦が高まるというのはこの集まりとしての絆がもっと強くなる事ですし、それがこの集まりに出ている意義というか、その中で色々な方々と接触させて頂いて、ご指導を仰いでいる訳です。

前回テーブルマスターをやったんですが、本当に緊張しました。皆さんどういう方が来られているかということが2回目のテーブルマスターやった時に良く分かりました。1回目の時は何も考えなかったので、普通の集まりをセッティングをすればいいかと思ってたんですが、今回はそういうもんじゃないなという事が分かって、そういう経験も非常にありがたいなと思うし、皆様方がどういう風にお酒を飲んでらっしゃるかということも拝見させて頂いて参考になるという事で、ここの中で勉強させて頂いているというか、ものすごい経験になっており非常に感謝しております。

吉田 はい、では次村口さん。

村口 例会の話からさせて貰いますが、まったく利害関係にない中で何をやって行くかというと、やっぱり人が会うということがすごく大切で、それが1ヶ月1回で良いのかという話だと空きすぎて、1週間に1回会うというシステムが、やっぱり奉仕という意味では大切だと思います。

あとは、さっき大野さんがおっしゃったように「色んなことをやっていいんだろう」と僕は実際に思っております。だからここに書いて有る様なものは良く計画されているなと思いますし、そこに関係している方々がちょっとバカになって盛り上げて、そして人を集めめてやるというのが大切な事かなと思っております。

吉田 次、山下さんお願いいたします。

山下 クラブの親睦を進めるにはという事ですが、先程お二方、大野さん、前田さんが言われた様に、このシステムは良く出来ているんですね。しかも週1回集まって顔を合わせて食事をしてここに有る様な色んな会まで入って、同好会も各種ございますし、これ以上の事があるのかなと。これかなり過密ですよね。私としては各会員の気持ちの持ち方が変わればもっと親睦が深まると思います。

吉田 ありがとうございました。という皆さんのご意見です。

森本(茂) 副委員長、今の話の中で何かご意見はないでしょうか。



岐部 会員の皆さんと仲良くなつた一番のものは、3か月に1回のテーブル会、お酒を飲んだら日頃言いたいことも言えますし、仕事の内容について初めて知ったという事が結構多いですね。そしてテーブルマスターの行きつけの店がどういう店かよく分かります。僕らが全然行った事が無い様なこういう店もあるんだなと、非常に勉強になります。私は現在年金生活をしている様な次第です。だから職業奉仕というような観念は残念乍ら、昨今は少し薄れてますね。でもロータリーで仲の良い友達も沢山出来ましたし、まだ席を置かせて貰っております。宜しくお願いします。

森本(茂) では次に進みたいと思います。「木を育てるより人を育てよう。」これは設立の時に平野特別代表が提唱されてずっとそれを引き継いでいるテーマで、これに基づいて色々な事をやっている訳です。それでは、司会進行は廣瀬さんで宜しいですね。

木を育てるより、人を育てよう。

廣瀬 「木を育てるより人を育てよう。」というテーマですが、色々ボイスカウトとかライラセミナーとか、小学校へ図書の寄贈とか有りますけど、今考えている事が有れば一人ずつ意見を言って頂きたいなと思います。大野さん。

大野 要するに、人を育てようという事だろう。書いて有るとおり、ボイスカウトとかライラセミナーとか、子供たちへ歴史の本の配布とか、やっぱり最初みんな子供だろうと思うんですよ。

なぜ日本人が世界からいうと勤勉実直という事でみられるのか、日本人は素晴らしいと。今度の東北地震の時も、世界の皆さん、ニュースから日本人の素晴らしいを確認した訳でしょうが、いざ中に

創立30周年記念座談会

入ってみると色々な人間がいるんですよね。

100%が100%じゃ無い。いい勤勉さというのが日本人は率としては世界に対してものすごく高いんじゃないだろうか。

確かに日本人は勤勉なんですよ。素晴らしい人が良いと思います。それは昔から培ってきたものなのか、元々持って生まれたDNAなのかどうか分からぬんですが、そしたらやっぱり、「子供を育てよう」と云うテーマは今からの日本にとってはホントに大事な課題。人を人として見て無い様なそんな日本人を作りたく無いと思っております。子供たちに対して正しい歴史を教えるとか、いろんな本を与えるとか。それと、この間テレビで見た里山教育、あれもまた素晴らしいなど。

子供たちは子供たちで修正能力があるというのは素晴らしいなと見ていましたが、そういうものに関してロータリーが何か出来ないかなと。このような事を1年でも2年でもいいけど一緒に考える時期があって、そして実行する時期もあって、全部合わせて10年で、40周年の時に「こうやったよ。」と言えるようになればいいかなと、思っております。



廣瀬 ありがとうございました。

我々が体験してきた中で大切なものを親が子供に伝えていかなければならない、という使命感があるのではないかと。折角ロータリークラブで社会奉仕とか、国際奉仕とか色々奉仕活動がある訳ですので、次世代に向けて、子供たちへ本を寄贈したりセミナーをやったりボースカウトと一緒に歩いたりすることによって、子供たちと同じ目線に立って、一緒行動して、体験しながら、伝えていかなくてはいけない。そうでないと日本の未来に色々問題が起きて来ますね。私たちも戦争体験はありませんが、おじいちゃん、おばあちゃんに伝えて貰ったこととかを少しでも伝えて行けたらいいなと思います。

前田 いろいろな社会活動で木を寄贈して何とか寄贈とか、建物に建築費を出しましたとか、そうではなくて重要なのは人間なんだ、という主旨の話なん

だろうなと考えていたら、標語については形ではなくて中身、本質的なものを追及するというのがクラブの本質という趣旨の話と思っておりました。

人を育てる、ということで子供の話が出てましたが、自分の周りについて一番関心のあることといえば、若い弁護士に、上の世代から継承したものいかにバトンタッチするか、というようなことをものすごく感じています。

一言で言えば何が依頼者にとってベストなのかというか、商業主義に走らないとか昔から引き継がれているものが業界でも失われつつありますので、そういうことについては自分でできる範囲で、さつき小副川委員長が各仕事の中でと言われたことを受けて、私も自分の仕事の中でそのようにと考えております。

もう一つは、メディアとの関わりが比較的あるポジションにありまして、若手の記者に対しても、彼らによって多くの人を傷つけることもあるわけで、彼らとの接触の中で我々の持っている感覚とかを伝える、というようなことを職業柄考えています。

廣瀬 ありがとうございました。次は村口さんお願ひします。

村口 「木を育てるより人を育てよう。」という標題を最初見て、なんでこんな標題になるのという疑問があつて、ちょっとその趣旨を教えてもらいたい。平野特別代表に何かがあつてこの表現になったのでしょうか。

森本(茂) それは、木を植えて、「これはロータリークラブで植えました。」とかいうのが当時よく行われていて、それよりも真剣に人を育てることの方が大切ではないか、というのが趣旨でした。

大野 人を育てるというのは、ロータリアンを育てるということなのですか。

森本(茂) 子供も含めて周りの人をということでした。だからボースカウトも一番最初にやつた仕事でした。

村口 よくわかりました。子供たちという話にもなってくるのでしょうが、私としては十人十色で、色々な方がいらっしゃいますよね。

ぞしゃく
咀嚼して言うと、私の祖父の時代、私の父親の時代、私の時代、そして自分の子供たちの時代、人に

創立30周年記念座談会

迷惑を掛けてはいけないとう基本的な事はありますか、こうしなければならない、ああしなければならない、これはこうあるべきだ、日本人はこうあるべきだ、結果は早く出さなければならない、というパターン化されている風潮の中で、成人の人も大変だろうし、なおさら子供たちも大変だろうと思う。

やっぱり人と顔を会わせて、会話をし、相手がなぜそんな表現になるのかなどを考えながら人と接していく人は育っていく、変な方向に行かないのではないかと思っています。人を育てるという事はフェイス・トゥ・フェイスの中で会話をするのが大事ではないかなと思います。その中でロータリーとしてやって行ける部分を見い出していきたいなと思っております。

廣瀬 ありがとうございます。続きまして山下さんお願いします。

山下 子供たちは伸び伸び遊んでいる様に見えますが結構世界が狭い、なかなか他の世界が見えないような状況に昔からあるんですよね。新聞の報道などによると、まずい事には蓋をして表に出さないという状況が多いんだろうと思うんですけれども、そういうなかで、ロータリークラブはある程度余裕のある方、常識のある方々が集まっている団体だと思います。物を送るのも大事ですが、それだけで無くて交流する、実際にそこに行って目で見て子供と接してみると、そういう事が大事ではないかという気がします。

大人がそばに居て関心を持つてくれるということが子供も分かれば、もっと伸び伸びと育っていくのではないかと思います。

廣瀬 ありがとうございました。では最後に吉田さんお願いします。

吉田 子供と交流を持つという事は一番大切だと思います。僕の職歴の中に仕事をした場所として、知能障害者とか完全に鉄格子の中に入れられて放置されていました、落ち着かせるために薬を打たないといけないというレベルの少年少女たちが集められ

ている場所があります。軽度の方は散歩をしたりしてらっしゃいます。そういう障害のあるお子さん達の所にロータリークラブの皆さんがせめて見学に行って、子供たちというのは正常にボーイスカウトで頑張っている子供だけじゃないよということを知る。

それともう少し軽度な障害のある方と一緒に食事をするとか、たとえば岐部農園を開いて頂いて軽度の障害のある子供たちと一緒に野菜を作るとか、考えてみても良いのではないでしょうか。

理想を言えば、ロータリアンが軽度の障害のある子供たちとニンジンやキュウリを作つてそれが育った時にそれを使つた食事会をどこかで、これはロータリーのお金ができると思うので場所を借りて食べるとか。ボーイスカウトの人達を招いて障害のある子供たちと一緒に夜間例会するとか、子供に触ることによって、僕達も勉強になるし、彼らも医師とか弁護士とか立派な大人の職業の話などを聞いて学んで頂くと有難いと思います。

僕の場合はどっちかと言うと正常な子供より障害のある子供達を何とか助けてあげたい。

廣瀬 有難うございました。ここに書いてあるテーマに基づく具体的な実績というのは、その時その時の記念行事みたいな形でボーイスカウトに支援をしましょうとか、図書館に本を寄贈しましょうとかいうのがあった訳ですか。

森本(茂) そうですね。歴史の本を配つてそれが終わって、その次に何をしようかという話が有つて図書を寄付したらどうかという提案がありました。一つの課題を、3年あるいは5年かけて順番にやってきたことです。

廣瀬 年度毎にテーマを決めて、具体的にどういう形で将来の子供たちに提供していくのかということを、皆さんで知恵を出し合つていく、そういう活動が最終的に「木を育てるより人を育てよう」という形で奉仕活動になったのではと思います。

森本(茂) このテーマについて他に何か意見はございませんか。

廣瀬 今思い出しました。母校の修猷館高校では、



創立30周年記念座談会

高校生がこれから就職する、大学に行くという、進路を決めるという時期に、我々職業人が職業別のグループを作つて実際に教室に行き、実務の話ををする。高校生は興味のある職業についている先輩の方の話を聞くというような催しを講座みたいな形でやられたんですが、そういったのも一つのやり方ではないのかなと思いました。

森本(茂) 具体的な話も出てきましたが、最後のテーマが40周年に向けて「魅力あるクラブをどうやって作れば良いか」についてですが、せっかくの30周年の座談会ですから、幾つかこういう具体的な話が有りましたというような事がありましたらいかがでしょうか。

魅力ある福岡北ロータリーに向かって



村口 ここに書いているテープル会にしても夜間例会にしても野球にしてもカラオケにしても、人が集まってやろうとした時に近づけば近づくほどちょっとした摩擦が起こるケースが有るのです。

組織に対する熱い想いは大事ですが、何処かで眺めて上手く纏まるように、そういう人達の集まりにしたいと思っております。

たとえば高校や中学の関係の集まりで何かをやろうとした時にそこに集まって来ない人がもっと悪いのですが、集まって一生懸命やろうとした人たちの中で仲間割れをしたくないと思います。そういう事に気を付けながらゴルフ同好会はやらして貰っていますが、そういう事はきちんとやっていきたいと思っています。我々の北ロータリーも色々有ると聞いておりますが、上手くやれる様な会にしていきたいと思っています。

吉田先生の話は具体的で、こういう子供達と一緒に何かをやってみると言う事に賛成をしたいですね。

吉田 話をすると全く通じない、言って聞かそうとしても通じない子達です。その子達の手を取つて

「これはこうですよ、こうやって植えよう。」と言つたら喜んで植えるわけですよ。

非常に失礼な言い方ですが、この子達は将来立派な人間になれない子達なんです。10歳にもなっていない子供で脳に障害が有るために、僕たちが死んでもあの牢屋の中で「ガアー。」と言って一生暮らすわけですよ。長生きする子も少ないので、このまま30、40才になってもあの牢屋の中で何も悪いことをしていないのに暮らさなければならない。大人は悪い事をすると牢屋に入りますが、その子達はそうじゃないですから。そういう子達を見て喜ぶんじゃなくて、見て何かを思うという事も僕らには大切だと思います。

逆に勉強させて頂き、軽度な子たちと一緒に何かをすれば、普通の子を育てるのと訳が違うという事を体験して頂ければ良いのではと。

こういう事は今まで実施したことは無いですね。そういうことをやられたらいいんじゃないですか。

山下 わりと裕福な所でまともな子供達が一番育て甲斐は有るんですよ。ただ、吉田先生が言われた「今も牢屋に入っている」というような事は全然考えて無かったし、そういう世界が有る事も知りませんでした。

分かりやすく言えば特別支援学校に行ってある子供さんや、子供さんだけではなく保護者の方は特別な苦労をされていらっしゃるでしょうから、どう考えても普通の子供をもつた父兄よりは交流とかいう世界が狭くなっているように思えます。

そういうところに全く別の世界との交流が有つて、「世の中から自分たちもちゃんと見られている。孤立した世界じゃないんだ。」という気持ちを持つてもらえば、うれしいことだし、それがきっかけになって、社会問題になれば一番いいのかも知れませんが、目先が変わってその時だけでも嬉しかったという、それだけでもいいですし、そういう事に何か貢献出来ればやってみても良いのではと思います。このテーマでいけば、そういう部分に目

創立30周年記念座談会

を向けて見るので今まで無かった事だし良いのではと思います。

吉田 かわいそうな子供たちを集めてという意味ではなく、人を育てようということの新しい試みの一環としてですね。

山下 あまり深く関わると時間もとられて無理ですから、そこまでする必要はないけれども、いつも別の世界の人が見守っているという部分があればいいのかなと思います。

小副川 どちらかというと、今までは日のあたる所の世界に我々ロータリーは接してきている。吉田先生が言わされた様にもう少し日蔭の部分の所に手を差し伸べるというのもいいのかもしれない。

そこに行って一緒にやって何かやるとか、一緒になつて汗をかくとか、そういうことの方がロータリーには沿っているのではないだろうかという気がします。

森本(茂) 時々来られた方に聞いてみると、「仲良くやっておられて良いクラブですね。」と言われます。

村口 オークラにメイキャップにいきましたけど、あれはまた人数が多くて名前なんかも分からんだろうなと思いますね。

森本(茂) 派閥化するとかして面白くないとかいう話を聞きます。

村口 当クラブの目標は75人位で、それがマックスですかね。

吉田 大浦会長が言われているのは経営的にそれ位はほしいと言っておられるのですね。

小副川 そうですね、運営的に75人位有ると非常にやりやすい。30人以下だと役割が多いですよね。それこそずっと何かの役をやっていくなくてはいけない。

山下 今は65人くらいですか。

小副川 なかなか70を超えないです。

吉田 70人位が丁度良いんでしょうね。

森本(茂) 一度だけ70人を超えた事が有りますよね。

小副川 あくまでもクラブ単位で決めて行くという事ですから、奉仕活動も自分たちで選択していくという事で縛りはありません。私は魅力ある北ロータリークラブに向かってという事は、今までやってな

い試みにもっとチャレンジして行くという風なクラブであっても良いんじゃないかなと思います。

吉田さんがああいう場所で夜間例会をやったというのも一つの試みだと思います。やってみないと分からぬじゃないですか。結構喜んでいる人もいたわけですから、こんな事も良いなと思う事であって。

吉田 えらく怒られましたもん、私の入会の推薦者である中野先生に「何を考えているお前。」と下の喫茶店で1時間位怒られました。

村口 話題になって良いじゃないですか。ある程度形が決まったことの話ばかりじゃ実際飽きますもん、いつも金太郎飴みたいな行事ばっかりではね。時代と共に評価も変わりますよね。

森本(茂) 以前、夜間例会で原鶴温泉に行ったんですが、そのときはパストガバナーの新家さんにお叱りを受け、その後1年間は夜間例会を自粛しました。

小副川 酒を出すのはおかしい、というそういう考え方の方で、この方はロータリーの生き字引のような方で、ライラセミナーを2700地区に導入された筋金入りのロータリアンなんです。その方が言い出したら誰も何も言えない。絶対的な人でした。

岐部 僕なんか話をしたこともない。僕もずっと前から加入させてもらっていたが、あのころは2.26事件の生き残りの方が会長をされていたり、とても偉い人が会員におられました。

小副川 そういう点で今の北ロータリーは上からガサッと抑える方が居ないし、先ほど言った百何十人いる所はそういう方がごそっと居る。そういう面ではこの福岡北ロータリーは自由な精神が尊ばれて実行されていると思います。

森本(茂) 森本さん、何か一つ纏めでもないんですけど話してもらえませんか。

 **森本(裕)** 「伝統を重んじるのか、変革していくのか」ということに対する皆さんの中の選択というか、変えるという事に関して抵抗のある人もおられると思いますし、伝統があるということは大切なことであると思いますので、

創立30周年記念座談会

その辺りをどうやって行くのかなと考えていました。

会員全員の意思統一をして変化するのか、それとも元々のルールに従っていくべきか私としても考えないといけないとこかなと、今日の話を聞かせていただいて感じました。ただ、やっぱり個人的に言わせて頂くと、僕は変わっていくのが良いのかなという気がしているので、その辺を大人としての集まりでどう折り合いをつけていくかという事、その必要があるのかなと私はそういう気がしました。

村口 そういう時に、私がいつも思うのは四つのテストとかがあるじゃないですか。四つの奉仕に流れている考え方に戻れるようにしておけば、時代と共に変わっていいって良いのではないかと。一業種一名というルールも拡大解釈して今のような流れが有ると思いますので、原点に則りながら変わっていいって、問題が起きたら原点に返るという形が有れば良いのではないでしょうか。

森本(茂) あと5分程ありますので、もう一言ずつ位いかがでしょうか。

廣瀬 私は原点というのはポール・ハリスがクラブを作った経緯が、淋しい思いをしたという事でこの会を作ったという事が本に書いてありました。経営者の皆さんには基本的に孤独だと思うんですよね。相談相手が居るようでいない、腹を割って相談したりする人が身近にいないと。まだ入られて無い異業種の方が一杯いらっしゃいます。そういう方々を温かく迎え入れる雰囲気は北ロータリークラブは充分有っていると思います。

そういう輪を、もっともっと知らない方、ロータリーを誤解されている方に伝えていくことが大切だと思います。自分が年齢を問わず、そういう方々と一緒に今後仕事・プライベートにおいて、色々な形で生涯の友というようなつきあい、が出来ていけば有りがたい組織だなと感じています。

森本(茂) 平野代表が亡くなられた後、奥様がご挨拶に来られたのですが、「主人はロータリークラブに行く時が一番ホットする時間であったみたいですね。」とおっしゃってました。それでは時間になりま

したので、最後に委員長お願いします。

小副川 伝統というものは非常に大事なもの。それをどうやって時代に合わせていくか。北ロータリーがどうやって変わっていくか、この10余年で目指して頂ければと私は思いますし、私もたまたまチャーチメンバーやいう事で、10周年20周年30周年を経験させて頂きましたけれど、色々な意味で北ロータリーは変わってきてています。本当にフレンドリーな、本当に仲の良い一つの大家族の様な福岡北ロータリークラブというのを今感じますし、北ロータリークラブらしさが逆に他のロータリークラブに影響を与えるようなそういう変化を求めていく、そういうクラブを目指して行ってほしいと思います。

75名位が丁度良いんですよ。フットワークの良い福岡北ロータリークラブという事で何かチャレンジをしていくってほしいなと私は思っています。

森本(茂) 有難うございました。これをもちまして拙い司会でございましたが、終わらせて頂きます。

